

DRAMA かながわ

《神奈川県演劇連盟》 ★横浜市中区福富町西通り52 Tel.045-261-4866

2007年度神奈川県演劇連盟総会の記

2007年度 神奈川県演劇連盟総会



京浜協同劇団 藤井 康雄

4月15日(日)のお昼すぎ、予定どおり、今総会の受け入れ集団である京浜と川崎演劇塾の面々がその準備のために集結した。2階の稽古場にモップをかけ綺麗に清掃する者、看板を描く京浜の看板役者(護柔)がいるかと思えば、多摩の山中から調達してきた山桜を投げ入れ式流にて生けているものあり。下の厨房では交流会の仕込みで大童である。「西海亭」のマスターを中心にオードブル用の野菜を切る者、エビチリソース用の海老の皮むきに必死になっているのは私の記憶に間違いがなければ蒼生樹の関口氏、演劇塾の小川氏などだ。結構楽しそうなのだ。何時間後には自分のお腹に収まっていくさまをイメージしてでもいるのだろうか。そんなこんなで既に総会は始まっているのだ。

以下総会の肝心と思われる特徴的な内容に触れると一つは横田理事長が挨拶の中で発言している「演劇の社会性とその責任」についてであり、もう一つはそれとも関連するわけだが「機関紙活動の充実と強化」があげられるだろう。勿論、その他にも大事な発言は多々あったのではあるが、この二点に関しての絞った報告とさせていただきます。

前年度は「世界演劇祭」が成功裡に終了した旨の報告があった。これ事態がまさに演劇の持っている社会的行為の典型をなした事業であり、我ら演劇連盟が世に誇ってもいい実績であったと思う。今年度はそういった派手な企画はないと言いながら演劇連盟が中核となって取り組まなければ、と言うより「取り組むことによって局面が次々と開かれていく」であろう場面に我々は立たされて、というより「立っている」のである。

発表の場を持ちたいと願っている集団に広く門戸を開放し、会場費の減免や裏方への協力など新しい演劇造りへの可能性に満ちている「演劇博覧会」の事。

青少年センターからの申し入れによる合同公演の事。また、同じく青少年センターからの申し入れ「高校生に対する演劇的働きかけがなにかないか」ということから始まった「芝居塾」の試み、などなど。

これら総てが社会的責任の伴う演劇だからこそ出来る社会的行為なのである。

「自分の集団だって大変な困難を抱えているの・・・」にもかかわらず、「いやだからこそこれらに立ち向かっていく決意が必要とされている、そういった時代を迎えているのだ！」と言ったら言い過ぎであろうか。

二つ目の機関紙活動についてはもう字数制限があって書けないのだが「組織が組織たらんと欲すれば、戦略と戦術を全員のものとせよ」と、誰かが言った(誰も言っていないか?)言葉を書き添えて、以上総会の記。交流会の事に一言も触れられなかったのは残念!!

なぜ、「地域」にこだわるか

私たちのアイデンティティ

京浜協同劇団 城谷 護 (制作部)

私たちが地域にこだわる理由は、ほかでもありません。この地域に生き、この地域で創造し、この地域の人たちに観てもらう地域劇団だからです。「この日、この地で、この人々と」というのが私たちの創立以来のスローガンですが、何かを企画するとき、道に迷ったとき、いつも私たちはそのスローガンに立ち返って考えることにしてきたのです。

留意している四つのこと

私たちが地域に密着する上で留意していることを整理してみると次の四つです。

- 1) 地域を題材にした創作劇を生み出す。
- 2) 地域の課題や市民運動と連帯する。
- 3) 行政との連携を図り、提言や要望活動をして地域の文化を育てていく。
- 4) 稽古場を文化の拠点にしていく。

まず、創作劇のことですが、この数年間、なんとか地域に根ざした創作劇を生み出すことができるようになりました。

4年前、自力でできないならば外の人に力を借りようと萩坂心一さんに委託、地域医療のことを書いてもらって『いのちの砦』と題する作品を上演しました。地域の人々の協力があって、いつもの公演の2倍の2,200人の観客を集めることができました。

次に、これまた外部の書き手、小川信夫さんをお願いして『多摩川に虹をかけた男—田中兵庫物語』を書いてもらい、劇団単独の公演ではなく川崎市主催の青少年舞台芸術活動事業としてやったのでした。川崎演劇塾など市内の劇団や一般公募の青少年なども加わり、総勢70数人の市民参加型の公演となり、舞台も好評で3,300人の人に喜んでもらうことができたのです。(2005~6年)

3作目は劇団員の中から生まれました。和田庸子が川崎の“煙突男事件”を題材に『ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男』を書き、演出には東京芸術座の杉本孝司さんを招き、昨年から今年にかけて川崎と横浜で上演したのです。1,300人の人に観て貰ったのですが、好評で予約で満席という事態になり、来年春、川崎、東京、茅ヶ崎で再演することにしました。

力がないから思い切った企画を

このように上演が成功すると、他の劇団の人からは「京浜は力があるから」と言われますが、そんなことはありません。最高時30数人いた実働劇団員も今は20人ちょっとです。一つの公演で2千、3千人だった観客も1千人にまで落ち込んでいるのです。まさに創立以来のピンチです。

上記のような思い切った取組みも劇団に力があるからではなく、ないから外部の力も借りて思い切った企画を立ててきたのです。

次の創作劇としては、川崎で海を埋め立て、小作人に農地を分け与えた人物を描いた小川信夫作『池上幸豊とその妻』を来年秋に上演すべく準備にかかりました。これも川崎市の青少年舞台芸術活動事業に決まりました。

なんでも揃うデパートや便利なだけのコンビニ風では地域劇団と

してのアイデンティティ、存在価値は薄れます。その地域劇団でなければ生み出せないもの、その劇団らしいものを生み出していく、小さくてもいわば専門店としての劇団でありたいと思います。



時空を超えた舞台、『ミスター・チムニー! 天空百三十尺の男』

稽古場の外に出て行こう

我々は稽古場の中にとじこもってはいけない、もっと外に出て行こうと私は劇団の中で訴え続けています。公害、平和、母親、福祉、労働者などさまざまな市民の運動に連携を持ち、そうした中から創造の源泉を汲みとりたいし、また観客を増やしていきたいからです。

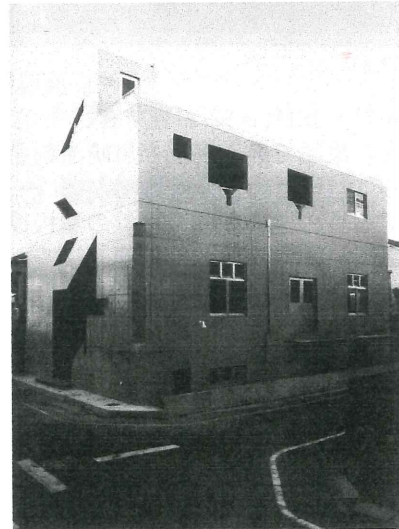
そうした連帯活動に力を発揮しているのが“ひとり一芸”運動です。みんなが芸を何か身につけ外へ出かけていこうというものです。今では太鼓、寸劇、落語芝居、南京玉すだれ、腹話術、面白マジック、バナナの叩き売り、司会、講演、そして音響、企画、演出などです。今ではかなりの劇団員が何らかの芸を持ち、出前公演をしています。年間百回くらいにのぼります。それは、創造的な訓練にもなりますし、外との結びつきにもなります。稽古場ローンの返済にも大いに役立っているのです。

行政との連携も大事にしています。「かわさき演劇まつり」を30数年前に興し、市が川崎演劇協会に委託する関係は今も続いています。また、青少年舞台芸術活動事業の委員に劇団員が任命されているのも、行政との連携からきていると思います。川崎文化会議や川崎市総合文化団体連絡会にも役員を送り出していますが、そうした中で、行政に対して提言や協力もするが、批判もするというスタンスで対応しています。

4,500万円の市民からの資金カンパを元手に1億6,500万円をかけて建てた稽古場。その稽古場を地域の文化の拠点にしていこうとさまざまな試みも続けて

います。劇団の稽古や公演の他に、今ではモダンダンス、ピアノ、フラメンコ、腹話術、コンサート、他劇団の稽古などに使われています。

新人も4名入ってきて、劇団も少し元気が出てきたところです。



観客・支援者のカンパを元に建てられた稽古場
110名の小劇場にもなる

劇団葡萄座

『キネマの天地』

作／井上ひさし 演出／山本伸二
 於：杉田劇場
 2007年 5月26日(土) 27日(日)

劇団葡萄座の舞台をはじめて見せていただきました。又この「キネマの天地」の作品にも始めて出あいました。

だれが女優松井チエ子を殺したのか、と、ずっと推理させながら、最後はそれが役者の本質をつかんでくれという女優教育だったとの結末に最後まで吸い込まれていくように見ていました。すばらしい作品でした。

かず子・駒子・菊江・小春の4人の女優の個性をうまく出し、最初の頃の女優としての見苦しいはりあいから、最後の方の同志意識お互いの思いやりにかわる心情が良く出ていたと思います。その女優達を改心させる男性達の演技に迫力があり、重みがありました。

音楽も、ここぞという時に流れ、ひときわ芝居をひきたたせてくれました。

評者：北蘭ヒロ子（劇団かに座）



劇団麦の会

『草の駅』

作／清水邦夫 演出／織田裕之
 於：関内ホール小ホール
 2007年 6月2日(土) 3日(日)
 (観劇日時：2日(土) 15:00)

「劇団麦の会」は初観劇。県演連界限には疎いが、芝居はよく観るほうだと自負している。さて、芝居。期待は「ほどほどに」、残念ながらそれを超えない舞台であった。部分的には役者の力量や持ち味も見え、装置・音楽・照明も的を外していないぶん、「もっとどうにか出来た」という不足感が残る。ただ、どうすればとなると難しい。

舞台が始まり、しばし迷走の後、やがて『草の駅』がみえてきた。作者がかつて紡ぎ出した言ノ葉が、役者たちのそれぞれの努力を冷やかに置き去りにしながら立ち上がってくる。「役」たちは最後まで清水文学の紹介者（朗読者）以上の存在として迫っては来なかった。もっとも、「紹介者」を貫徹した事も無意味ではない。だがそれだけで及第とはならない。

消化不良の源は何だろう。このテキストが「今の私」（演技者、観客とも）にどれほど切実な言葉になり得るのか・あるいはそのように「再解釈」できるのかどうか、という「生みの苦しみ」の痕跡が見えない。それは清水作品に漂う「詩」が要求する（あるいは、許容する）跳躍的な「発語」の力にもっと表れるべきもの、だったろうか・？。少なくとも私は最後の瞬間だけ、それによって報われたかった。題材の難しさでもあろうが、課された課題に迫れなかった印象である。

評者：河村はじめ（京浜協同劇団）



劇団かに座

『嫁も姑も皆幽霊』

一青時雨おつる頃一
 作／池田政之 演出／田辺晴道
 於：かなっくホール
 2007年 6月23日(土) 24日(日)
 (観劇日時：23日(土) 14:00)

生まれて初めてアマチュア劇団に入って4ヶ月。勉強の為と、今回初めて劇団かに座の公演へ足を運んだ。

ホールに着くと開場時刻には受付に長蛇の列。さすがに歴史のある劇団、人気の高さを思い知る。受付番号発行終了後もロビーはチケットを持つ人で溢れていた。番号終了間際に入場出来たが、空席がどこにあるのか分からず、客席をさまよっていたが、見つけることができず、親子室を開けてもらい大人ばかり10名程で観た。

ストーリーはとて面白く、笑える台詞がそここにちりばめられ、舞台に釘付けだった。口は悪くても、この世に残した家族を思い、戻ってきた幽霊たち。驚き、戸惑いながらも、戻ってくれて嬉しい家族たち。教わった『青時雨』という言葉、母親があこの世に帰ってからかみしめる主人公。親子室のスピーカーからでなく肉声で聞きたい台詞だった。

新妻役がもっと個性的でも良かった。

次回はぜひチケットは時間指定し、会場整理の方を置いて頂けるようお願いしたい。

評者：南直子（劇団「横綱チュチュ」）



演劇資料室より新情報

「21世紀戯曲文庫」「ハヤカワ演劇文庫」 ふたつの出版がスタート

最近、ふたつの戯曲文庫の出版がスタートしました。それぞれ特色のある文庫サイズの本です。

「21世紀戯曲文庫」は日本劇作家協会がインターネット上の仮想戯曲専門書店を通して「オンデマンド」受注するものです。

劇作家協会によると、日本では毎年膨大な戯曲が生まれていますが、書店などに置いてある戯曲は僅かであり、人気劇作家の作品ですら読む機会が限られています。

戯曲は売れない・・・結果として出版は控えられ、出版されても部数が少なく高価なものになってしまう。手に入らないから読者は減り、減るから更に出版されない・・・という悪循環が起こっています。この問題は現役劇作家だけの作品に留まりせん。岸田國士、三好十郎、森本薫、宮本研、田中千禾夫・・・等。日本が生み出して来た偉大な劇作家達の名作戯曲すら絶版になるなどの状況も起こっています。これは次世代への継承を考える上でも大きな問題です。

劇作家協会はこの問題に対処するため「21世紀戯曲文庫」をスタートさせました。

一度は読みたかった名作戯曲から、現役作家の未出版戯曲まで幅広いラインアップ。

価格はできるだけ安価に設定。第1回の配本は下記の通りです。

なお、オンデマンド出版とは通常の出版形態とは異なり販売予測による部数を印刷するのではなく、注文をうけてから1部単位で受注生産するもので注文があり次第、サーバー上に蓄積のデータにより印刷するものです。

第一回配本

- 1) 「喜劇 ほらんばか」秋浜悟史
- 2) 「宮城野」矢代静一
- 3) 「修学旅行」畑沢聖悟
- 4) 「絶対零度」鐘下辰男
- 5) 「宇宙の旅、せみが鳴いて」鈴江俊郎
- 6) 「裸でスキップ」鈴木聡
- 7) 「マリアの首 一幻に長崎を想う曲 一」田中千禾夫
- 8) 「カズオ」永井愛
- 9) 「オールドリフレイン」渡辺えり子
- 10) 「オッペケペ」福田善之
- 11) 「美しきものの伝説」宮本研

(これらの11冊は演劇資料室に配架済みです)

「ハヤカワ演劇文庫」を発売した。

早川書房は雑誌「悲劇喜劇」を1949年から発行、はじめてアーサー・ミラーの作品を出版するなど膨大な戯曲出版資産を有する書店です。

そのハヤカワから出るべくして出たシリーズ

その第一陣は

- 1) アーサー・ミラー1「セールスマンの死」

- 2) エドワード・オールビー1「動物園物語/ヴァージニア・ウルフなんかこわくない」
 - 3) ニール・サイモン1「おかしな二人」
 - 4) 清水邦夫1「著名人/楽屋/ほくらは生まれ変わった木の葉のように」
 - 5) 平田オリザ1「東京ノート」
 - 6) 坂手洋二1「屋根裏/みすず」
 - 7) ニール・サイモン2「サンシャインボーイズ」
 - 8) テネシー・ウィリアムズ2「しらみとり夫人/財産没収ほか」
- (これらの8冊は演劇資料室に配架済みです)

新たに発刊された二つの戯曲文庫シリーズで発行される戯曲はこれからも演劇資料室で取り揃えますのでご利用ください。

この本を入れてほしいというご希望がございましたら演劇資料室へご連絡ください。

できるだけ、ご希望に添うようにします。

「演劇資料室」 ヴォランティア大・大・大募集中！！

ご承知の通り演劇資料室の運営は横浜演劇研究所と神奈川県演劇連盟が共同で引き受けております。開設から2年、演劇資料室の存在が知られるようになり多様な利用者が来室されます。

約20人の方がすこしづつ時間を持ち寄ってローテーションを組んで日々の活動を支えています。

演劇資料室での仕事は多様です。図書貸し出し、受付、図書資料の整理、ファイル、演劇についての相談、データベースの入力、県演連の事務局の仕事など・・・

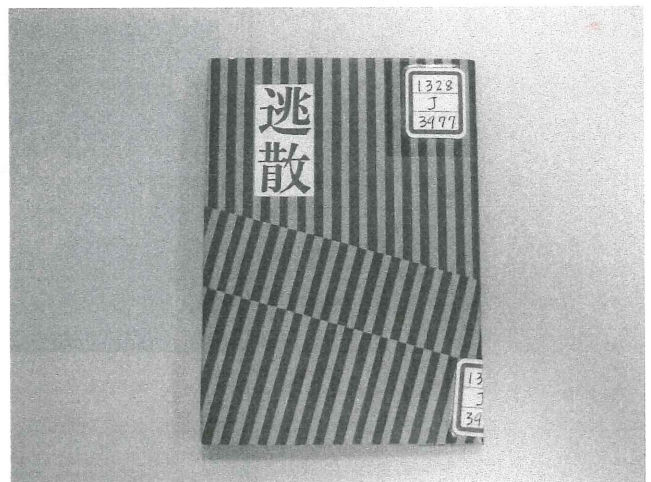
メンバーが固定してきました。県演連のみなさんには是非参加をおねがいします。

週1回3時間単位で参加いただければありがたいのですが。

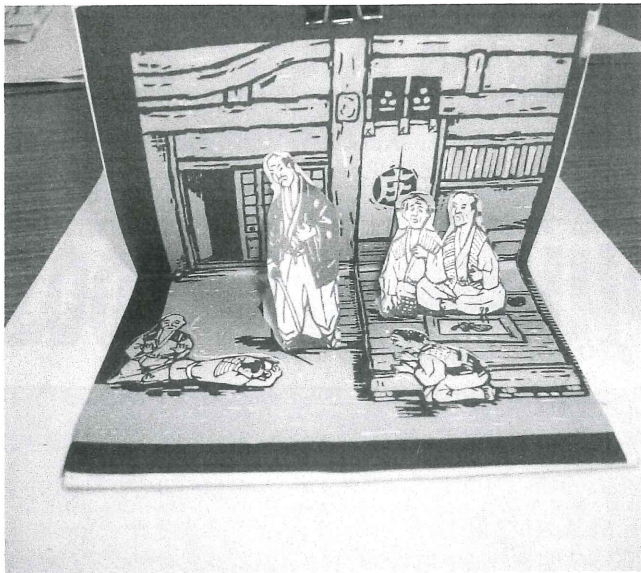
決してひとが多すぎるということはありません。仕事は山積しています。

こんな図書・資料があります 荒井さんのちよとんちく

演劇資料室所蔵の図書・雑誌・資料でちょっと目に触れにくい、めずらしいものを今号から毎回簡単な解説をつけてご紹介します。



『逃散』坪川健一作 豆本 108 x 80 x 5mm
発行所 えちぜん豆本の会 (福井市)
昭和41年(1966年)8月刊 用紙 越前和紙使用 限定300部



戯曲目録編纂の仕事をしていて数万冊の戯曲集をみているが豆本に遭遇したのははじめて。戯曲では他に例がないのではないか。

この作品は第4回全国青年大会演劇の部に出場する清水町青年団（福井県）のために書かれた。この大会で最優秀賞を受賞。因みに全国青年大会とは全国の青年団活動の発表の場で演劇の部にも各県の代表が競い合った。昭和50年以降青年団そのものが各地で解散、消滅してかつての輝きを失った。

「逃散」は雑誌「悲劇喜劇」1955年12月号に発表されたあといろいろな戯曲集に収録され全国の青年演劇、高校演劇で広く上演された。

作品の内容は藩政時代、米が浦の農民107名が藩の苛斂誅求に苦しみ一村全員が他藩へ逃亡、庄屋の彦左衛門ひとりが残りに責めを負うといものの。

作者の坪川健一氏は劇団福井自由舞台の主宰として活動、福井の代表的演劇人として識られた。2006年4月に永眠。

ドラマかながわ原稿 2007.06.25. 荒井

世界演劇祭

2006年世界演劇祭の実行委員会はそのまま残して、今年も活動を継続しました。

昨年はYOKOHAMA演劇祭と提携して1か国を招聘いたしました。招聘劇団の選定は、NPO法人こどものひろばの大原氏に委嘱し、ブルガリアの「オーバーコート」を招聘することに決定した。

作品の評価も高く、わずかの道具を駆使して実に豊かな創造を展開した。観客からはチャップリンを見ているようだという評価や、昨年のデンマークの劇団公演「ディッター」に通じるという意見もあった。軽妙で工夫された身体表現の中に、ブルガリアのおかれた国情、歴史を感じさせる自由への渴望が、伝えたいものとして響いてきた。

演劇を通して何をしたいのか、何をしようとしているのかを知ることが出来た。世界演劇祭は横浜にいながらにして世界の優れた演劇を観ることが出来るまたとない機会である。今回の公演については演劇連盟内の参加者は昨年に比して少なかった。世界の優れた演劇に学ぶ機会はその多くないので、我々自身の演劇活動の未来を探るためにも、これからもこの企画を継続していくことが必要だろうと思う。



オーバーコート
原作 (クレド・シアター/ブルガリア)

外套

劇団蒼生樹 勝崎 若子

ロシアの都市ペテルブルグの官庁の浄書係、アカーキイ・アカーキエビイチ。

誰からも愛されず、誰の保護も受けず、誰にも興味を持たれない万年九等官。彼の人生で唯一の華は奮発して、爪に灯を燈す様に貯えた80リーブリで新しい外套を新調した事。初めて官吏仲間に注目され夜会にも招かれ鼻高々、ところがその帰り道、命より大事な外套を盗られてしまう。

巡り合わせの悪いアカーキエビイチは、何処へ訴えても取り上げてもらえず、「有力者」からは反対に叱責され、絶望のあまり死んでしまった。

そのすぐ後、失意のアカーキエビイチの幽霊が夜な夜な現われ、人々の外套を剥ぎ取って行くようになり、やっと「有力者」の外套を剥ぎとってお終いになる。

と云うゴーゴリ原作の「外套」をブルガリアの俳優さんが、二人芝居で

しかも日本語で上演すると聞いて、興味を持たずにはいられなかった。

前年の世界演劇祭実行委員の芝居を観る目の確かさは、海外招聘三作品を思い返しても一目瞭然、今回も期待どおりであった。

アンケートの中にも、原作の生きることの不条理、脚本演出の出ようとすれば出られる檻、つまり己の呪縛からの開放、自由に生きることは創造的に生きる事、と云うメッセージが二人の俳優の実力の裏打ちある熱演に依って伝わり、十二分に満足する事が出来たと云う意見が多数ありました。

それに無理に日本語でなくても、テンポや感動をもっと共感したいので、字幕で観たいとの意見、または日本人からは発想出来ない日本語の使い方の新発見あり等々好評でした。

私も、女学生時代にドストエフスキーでロシア文学に挫折し、不勉強にも読んでいなかったゴーゴリをこの年になって読み、その面白さに眼から鱗の現状であります。

これからも機会ある度に、良い海外演劇の横浜招聘は神奈川県演劇連盟の大事な使命なのだ実感した次第です。

第4回神奈川演劇博覧会

2007年3月2日(金)～4日(日)
青少年センター多目的プラザにて

実行委員長 関口素実(劇団蒼生樹所属)

会場を移しての演博が無事に終了し、ホッ

動員は延べ人数ではありますが、1559名。ご来場頂いたお客様・共催団体である青少年センターへ、大盛況ぶりを強くアピールできたのではないかと思います。いろいろな点で課題を残す結果となりましたが、まず会場を移しての演博が無事に終了したことに、ほっとしています。

今回の出演劇団ですが、県演連からは葡萄座・かに座・横浜小劇場の3劇団。県演連外からは、今回3度目の出演となる劇団辻シアター、横浜世界演劇祭では大変お世話になりました川合弘子氏率いるSTUDIO D2、即興一人芝居のライト・トラップ、そして今回初のお披露目となるIC preview、劇団 Dream Maker、The 新茶の3団体、以上9団体。なかなか一度に顔を揃えそうにない団体が手を挙げてくれました。

「演劇の殿堂」である青少年センターでの開催。これは大変意義のあることであり、演博にとっても大きな一歩であると考えておりました。しかし、正直なところ動員の面では、当日を迎えるまで不安でした。目的の一つである「普段芝居を観ない人たちに観てもらおう」ことが果たせるかどうか?と。そこでもう一つ、裏テーマとして「実のある劇団間の交流」を実行委員会内でプッシュしました。それは出演劇団同士の交流だけでなく、県演連と県演連外の劇団との交流も含んでいるつもりでした。私の器量のなさもあり、誤解を生む結果となりましたが、現在の県演連がその姿勢を取るによって得るものも大きいのではないかと考えるのです。県演連に所属していない劇団(特に若手劇団)が、どのような考えを持って演劇に携わっているのか。演劇の日常化を目指すならば、それを知ること(もっと言うと、きちんと聞くこと)もその第一歩となるのではないかと。そのための演博でもありたいと思います(芝居塾にも同じことが言えるのでは?)。



アンケートで好評をうかがえる

アンケートによって頂いたご意見は様々でしたが、概ね好評でした。いくつかをご紹介したいと思います。

- 15歳 女性 学生「たくさんの公演を間近で、しかも『無料』で観劇できて、学生の自分にはとても有り難かったです。勉強

にもなりました。第5回があれば是非また観に来たいと思います。年に3回くらいの間隔でやって頂けると個人的には嬉しいです(笑)。」

演劇界の底辺を広げることに微力ながら貢献できたことを感じずにはいられないお言葉です。演博の趣旨を無意識に理解している若人がここにあります。ちなみにこの方は9団体中8団体の公演をご覧になりました。ありがとうございました。ただ、年3回の開催は現状では厳しいです。

- 67歳 男性「博覧会を是非続けて欲しい。ただそれだけ。演劇バンザイ!!演劇博覧会バンザイ!!」

この企画は続けることにも意義があると考えていたので、素直に嬉しいご意見です。また、一部では「若者の催し」と捉えられることが少なくない演博ですが、このご意見がこのお歳の方のものだということにも着目して頂きたいものです。

●25歳 女性「来て良かったです。機会があれば自分も参加したいです。お客さんの幅が広く、また満員御礼ですごい!!」
彼女は県内の某劇団(県演連外)に所属し、役者・スタッフとして活躍中の方。芝居を造る側の人間にとっても、演博は魅力的に映ったようです。今後、出演劇団として参加していただけることをお待ちしております。

●58歳 男性 公務員「昨年は相鉄本多劇場で見ましたが、この劇場は昨年に比べて臨場感があり、楽しくゆったりと過ごさせてもらいました。演じる方、観る方に若い人が増えてきたことも、今後の展開を考えると嬉しいことです。神奈川の演劇がさらに発展してゆく上でも、老舗劇団、若手、学生などが集うことが素晴らしいことだと思います。多目的プラザが老若男女の交流の場となることを願っています。支えたスタッフの方に厚くお礼申し上げます。」

我々県演連の理事の方々はよくご存知のお方。演博の主旨・目的を充分にご理解頂いた上で、今後の発展を期待しているご様子。今後も期待され続ける演博でありたいと思います。



次回の演博・第5回神奈川演劇博覧会

さて、先日の理事会で次回の演博・第5回神奈川演劇博覧会の開催が決定しました。2008年3月16～23日の週で、やはり青少年センター・多目的プラザでの開催となる予定です。

理事会では、実行委員を募集しています。私自身、実行委員長を務めさせて頂いて、運営面・制作面で大変勉強になり、得るものが多く、それらを所属劇団(劇団蒼生樹)に持ち帰り活かしているところでございます。興味のある方は奮ってご参加ください。